

# 末 黒 野

すぐろの

9月号  
(通巻913号)



## 立葵

森清堯

基地望みピースてふ名の黄の薔薇  
岩に坐しひたる澗声朴の花  
切株に写生の子らや若葉風  
街道を折るる目印桐の花  
繡線菊や坂沿ひの垣けぶらせて  
ぐづる子の涙ぼろぼろえごの花  
谷戸奥の能楽堂や若楓  
翡翠の睨む小流れ日を弾き  
本堂の引戸開けられ青葉光  
立葵はや学童の丈を越し  
谷底の白き大岩瑠璃蜥蜴  
スケボーを駆る子転ぶ子風薫る

## 遠河鹿

岡野里子

葉隠れの指先ほどの実梅かな  
小糠雨新緑いよよ鮮やかに  
若楓梢の葉ほのと紅さして  
糸ほどの雨に震へて白牡丹  
白牡丹閨魔見てきし夕つ方  
名のあるも名無きも競ひ薔薇の園  
湖よりの風を孕みぬ花あやめ  
尺蠖や閨魔の膝の尺をとり  
夏草や水無川の石間より  
青山の日差集めて繡毬花  
露天湯の山の暮色や遠河鹿  
紫陽花や少年まさに変声期

瀬戸の入日

黒滝志麻子

(顧問)

海風や朝より晴るる花櫛  
島々の朝の日に映ゆ山若葉  
一枚の海を引き寄せ濃紫陽花  
満開の杜鵑花見下ろすホテルかな  
老鶯や森の深さを計り鳴く  
絵扇を持ち旅立ちの三日かな  
短夜を寝惜しみ旅の夜は明けぬ  
夕風や瀬戸の入日を暮るるまで

甲矢集

更衣

菅野日出子

茂りたる楠を囲めるベンチかな  
遠つ国の戦に涙ばら咲けど  
月涼し娘の復習ふりコーダー  
薫風や少女のゆるるイヤリング  
すひかづら香る坂道までの試歩  
衰へをかくすすすべなく更衣  
寺裏の馬頭観音滴れり  
庭のものを摘みて薬味に冷奴  
後より子の差し掛くる黒日傘  
なにも出来ぬこと恥らひて夏の果

葭切

田中臥石

アカシアの花の崖より鳶舞へり  
波郷師を辿る入梅の南白亀川  
歳時記の我が句読みをり梅雨籠  
潮騒を鎮めて暗し梅雨曇  
マスクして自転車を漕ぐ青田徑  
老鶯の 訝海透く 松林  
花合歓や東京捨てて五十年  
疫病禍の無き青山の地の浜木綿  
葭切の波郷の声す南白亀川  
子燕のすいと頭上を風切す

## ソーダ水

森清信子

真つ直ぐに目指す帆船初夏の風  
湖めぐる貸自転車や新樹光  
湧水を廻す水車や柿若葉  
ホテルより指呼の朝富士閑古鳥  
薫風や空と大地は詩の宝庫  
恙無き母百二歳桐の花  
錐揉みにはた矢のやうに夏落葉  
ジーンズに腰を詰めこみ青嵐  
五十年即かず離れずソーダ水  
軍港の空を解せり夏つばめ

## 鮎釣解禁日

石黒興平

展帆の船のふくらみ風五月  
脱ぎ捨てし皮に雨ため今年竹  
一村の島めく植田明りかな  
釣堀は人みて静か小半日  
晴天に勇み鮎釣解禁日  
焼鮎や赤き熾火に身を反らし  
堰落つる水のきらめき行々子  
散り敷いて小紋模様やえごの花  
水馬の飽かず青空蹴りにけり  
羅や身に軽ければ心根も

## 乙矢集

配列は音順、月毎の循環



## 鮎の宿

太田良一

長雨のごとき法話や樟若葉  
名峰の尽きぬ名水冷奴  
短夜や片つ端から拾ひ読み  
床の間の京人形や鮎の宿  
沖遠く汽笛去るなり夏霞  
神木の大きく育つ白雨かな  
父の日の百葉の長膝に抱き

## 苔の花

大川暉美

草刈るや鋏の音たて匂ひたて  
鉄線花暮れゆく空の茜色  
木漏れ日を踏みて山路や夏落葉  
小走りのヒールの娘青時雨  
天を衝く祭太鼓や若い衆  
老幹の歳月を見せ苔の花  
匂ひ立つ花栗山の風つのもり

## 花慈姑

岡田史女

蛇行せる多摩の流れや夏燕  
マラソンの子等万緑を抜けてきし  
みどり児のぽぽと笑窪やさくらんぼ  
黒南風や二度寝の手足重たくて  
足弱くなりしと思ふ蛇苺  
山よりの水を集めて花慈姑  
湧水に青葦原のざはめけり

ソルボンヌ

小田嶋野笛

母の形見姉の形見や更衣  
杖と為すつもり藜抜かれけり  
婆んちと言うて来る子や豆の飯  
母の日の淋しき酔ひや一夜漬  
薔薇咲いて行けず仕舞ひのソルボンヌ  
あご飛ぶや太古の鳥を恋ふやうに  
自在鉤の鍋の煤けや鮎の宿

葛 若 葉

加藤 静 江

瑠璃蛺蝶風の空より現れて  
夕晴れや滴の光る草若葉  
錆深き扉にからみ葛若葉  
畦青むかすめて速き鳥の群  
深々と連山包む緑かな  
潮入りの町川に佇ち夏の鴨  
人声へ鯉の動きや迎へ梅雨

苔 青 し

高木 邦 雄

由比ヶ浜卯波の残す忘れ貝  
苔青し箱根古道の九十九折  
涼しさや詩囊ふくらむ峽の径  
七変化ローランサンの彩りに  
かるの子や轍に転び母を追ひ  
はや青む植田潤す瑞雨かな  
調教馬憩ふ木の蔭風薫る

蔓 橋

長尾 太 伊

薫風や七半渡る沈下橋  
磴険しき金刀比羅宮や夏木立  
谷若葉一步に揺るる蔓橋  
蔓橋渡り切つたる涼しさよ  
芙蓉峰浜屋顔に寄する波  
蒼穹を押し上ぐる薔薇紅極む  
城跡の濠を埋めて未草

迷 び ごと

池 乘 恵 美 子

藤波の雨紫にけぶりけり  
母の日や娘の声の母に似て  
一見も持て成し厚く夏料理  
街騒の緑雨に沈む夕べかな  
緑さす鈴懸の道雨の道  
紫陽花や移り気なるは誰ゆづり  
羅やひとつ捨てたる迷ひごと

梅雨に入る

今 村 千 年

ひさかたの重くなる空走り梅雨  
梅雨に入るいつもと違ふ朝湿り  
五月雨のさねさし相模坂数多  
どくだみの花庭隅のここかしこ  
玄関に出迎ふ猫の涼しさよ  
目を病みて片目塞がる暑さかな  
子規逝きて百二十年糸瓜咲く



青炎集

森清

堯選



横浜

渡辺美智子

雨宿り燕の子等と出合ひけり  
一閃の翡岸の葉影より  
初蛭人恋ふるかに寄り添ひぬ  
カップルに蛭の闇を譲りけり  
隅田の花火てふ紫陽花や雨嫌ひ  
夏瘦をせぬ体質よ塩むすび

横浜

岡美智子

晶子忌や今こそ歌へ声高く  
垣覆ふ木香薔薇や黄色の香  
傘中のひとりの世界梅雨に入る  
空白の増ゆる日記や梅雨の空  
水色の雨にででむし角光り  
葛ざくら濃き造り葉の味気なき

横浜

小嶋紘一

空青く岩囓む海や夏来る  
植栽の駄賃に薔薇をもらひけり  
さつき雨音なめらかに鎖樋  
大瑠璃のこゑや墓苑の木立より  
日も場所も時刻も同じ蛭の夜  
掌のなかや蛭の息つかひ

横浜

梅田武

冷麦を啜り了へたる吐息かな  
母の日の妻や傘寿の薄化粧  
凭れ合ふひと日の疲れ夕牡丹  
父の日と言へず一日の暮れにけり  
風筋に一入聴し今年竹  
一段の妻の貫禄あつぱつぱ

藤沢

宮澤靖子

自撮りせり茅花流しのただ中に  
散策のいつもの道や溝浚へ  
屑繭は羽化せり足の覚束無  
植糸終へたる棚田それぞれ空の色  
海風や阿弥陀被りの夏帽子  
走り根は良き置き所落し文

相模原

内田梢

梅の実を拾ひて朝の散歩かな  
曲げられぬ女の意地や今年竹  
梅雨晴間草を引きつつ句作して  
昨夜の雨四葩の藍を深めけり  
焼茄子の香り厨に満ち満ちて  
父の日や好物の酒仏壇へ

横浜

小山ほ子

鉄線花まなこに浸むる濃紫  
久々の大筆重し梅雨曇  
再会のハグのぬくもり薄衣  
箱庭や十三人の武者在し  
五千歩の試歩の公園顔に汗  
老鶯や開拓進む藪の奥

横浜

山咲和雄

四五枚の代田に勇姿八ヶ岳  
石仏の百観音や青葉山  
水出しの茶にそへられて柏餅  
三代の学ぶ校舎や桐の花  
子供の日肥後守にて竹とんぼ  
娘より妻へ手渡すカーネーション

横浜

真柄百合子

夏のれん地味を選びて買ふことに  
緑蔭の瞑想たれかに視られたり  
些細なる怒りしづまり冷し麦  
蚊遣火や話真実味を帯びて  
浮人形誰が買ひしか判らずに  
提灯のぼんやりともし五月闇

東大和

谷口律子

長屋門の乳鉢の錆や椎若葉  
人はあるらし散りそむる夏落葉  
浅き濃き葉蔭のときれ夏日かな  
手術後に浴ぶる万緑深呼吸  
子守宮よそつと外す虫とり器  
つんつんと地の面に遊び梅雨の蝶

# 耕 土 集

## 岡野 里子 選

横 浜 白 居 澄 子

やはらかき松風の夕豆の飯  
子かまきり一人前の鎌の振り  
アイリスや昨夜の雫の綺羅の数  
十葉の花見るたびにいとほしく  
川蜘蛛や風に逆らひあきませず

狭 山 小 林 友 子

箒目のわずかに乱れ半夏生草  
吐息めくあぶく一筋水中花  
乗り出しさばく鶴匠の手繩かな  
青蜥蜴あつと言ふ間に石の下  
目前を過る流鏝馬息遣ひ

横 浜 森 川 享

腰伸ばすテレビ体操茄子の花  
登校の子の雨傘やさくらんぼ  
父の日や樟脳の香の上着干す  
夕刊のポストの音や梅雨晴間  
ただいまの白靴揃ふ夕餉かな

横 浜 片 岡 登 志 枝

一陣の風茅花野に銀の波  
菖蒲湯やかをりの中に妣の顔  
塵出しの肩濡れそぼつ墜栗花雨  
辣蕪剥く掌に無垢の白光る白  
草刈や群れ居る鳥の悠悠と

横 浜 丸 山 佐 伎 子

師の好む桜桃の実やアメリカン  
ウエスへと捨つる思ひ出更衣  
煮玉子や切子の皿の音澄みて  
実梅落つ青き芝生へぼんぼんと  
大輪の薔薇のほどけて押し花に

横 浜 近 藤 知 子

散る桜仔犬と眺む昼さがり  
菜の花や風と光のカンタータ  
燕来るや歯科検診の日の近し  
花菖蒲ひらく朝や小糠雨  
風はこぶハンカチの花揺れしほし

ありなしの風に舞ひつつ竹落葉  
八景ブルーてふ名の四葩海へ向き  
権現山樹林に通ふ風涼し  
磯蟹を追ふ幼子や頬真つ赤  
淡き色の太き若竹天を衝く

横 浜 北 野 節 子

いざ手術看護師凜と夏立てり  
梅雨晴間話上手の薬売り  
雷鳴や嬌声あぐる女高生  
軍港の兵の白服金ボタン  
剣道場面の一声響く夏

横 須 賀 梅 野 宏 子

梅雨時の庭の消毒スミチオン  
羅や夫を誘ひてレイトショー  
黙々と研師の眼玉の汗  
兄逝くや待合室の夏日影  
水無月や家の塗り替へ滞り

狭 山 山 中 ミ ッ

老いふゆる街や勢の鯉幟  
葉桜や富士を遠くのバス停に  
風薫るベンチの夫婦アイボ連れ  
花水木の白満ち溢れ風渡る  
故郷は木の間に海よ花蜜柑

横 浜 吉 田 千 恵 子

古民家の燃しのかをり青簾  
ペランダや朝の匂を開け放ち  
香水のミツコを残し席立ちぬ  
自己流に弾くウクレレや夏浅し  
みどり子の手の平ほどや枇杷届く

横 浜 梅 津 ま り 子

ひたむきに左に右に羽化の蝶  
一票の句評一喝薄暑光  
若萩や鎌倉店に京女  
毛虫乗る二葉完食即爆睡  
ぼつぼつと胡瓜の五弁映えてをり

横 浜 伊 藤 鴉

蛍火や惑はす闇の点と線  
蜜豆や弾む喋りの果てもなき  
引退の漁夫の定席南風吹く  
梅雨の雷天明と記す供養塔  
斑猫や今日の散歩は当てずっぽう

横 浜 喜 田 君 江

書き置きは蛍狩へとのみ記し  
万緑や写経の墨の芳しき  
アトリエの窓に真紅のアマリリス  
蹲や浴ぶる万緑欲しいまま  
美ら海の空に弾くやラムネ玉

横 浜 岩 崎 藍

ぴかぴかの児等を祝ふや花吹雪  
中庭に生徒の声や若葉風  
ビル街の小さき釣堀にぎにぎし  
哀愁を奏つるギター夏の夕  
母の日妣似のか所を子に数へ